

平成 18 年度以降の教育課程についてのアンケート

解説と質問

(回答は別紙にご記入ください)

平成 18 年度以降の教育課程について、教育改革室 WG の最終報告をまとめるための参考資料として、下記の事項について、現時点での貴学部のご意向をお知らせください。

平成 15 年度教務委員会教育戦略推進 WG 教育課程専門部会の「平成 18 年度以降の教育課程について」の中間報告(別添)に沿ってお伺いします。

問 1 - 1 . 「 2 . 基本方針」(中間報告 2~6 ページ)全体について、ご意見があればお聞かせください。

問 1 - 2 . 特に「(4) 各学期毎に履修単位数の上限を設ける」ことについて、貴学部での今後の検討の予定をお聞かせください。

WG では、特に 1 年 1 学期に履修科目が多すぎて予習復習の時間が取れず、どの科目も未消化に終わる傾向が顕著になっていることから、平成 18 年度以降、1 年次についてだけでも履修単位数の上限を設定することを検討しています。

中間報告では、「2006 年問題において最も肝要なのは、学部一貫教育システムの中で、全学教育と学部専門教育の有機的連関がどう設計されるかである」という観点から、今回の全学教育カリキュラムの検討を「学部専門教育のプログラムの新たな検討に繋げる」ことが要請されています。

問 1 - 3 . 学部専門教育について、貴学部での今後の検討の予定をお聞かせください。

問 2 - 1 . 「 3 . 科目別の主な改正点」「A . 文系科目」(中間報告 7~8 ページ)の「(1) 基礎学力育成のための「論文指導」, 「一般教育演習」の整備・充実」について、ご意見があればお聞かせください。

2 - 2 . 専門科目(学部ごとの専門教育)と文系の教養科目(全学部向けの非専門教育)、あるいは高校で履修する文系科目との接合の改善を図るため、「(2) 「文

系基礎科目」を新たに設ける」ことについて、以下の問にお答えください。(文系学部のみ)

問2-2-1.「文系基礎科目」として提供可能な授業科目を挙げてください。

問2-2-2.「文系基礎科目」を貴学部の学生に履修させますか。

問2-3.「(3)複合科目の中に、文系共通基礎的な授業科目を設ける」ことについて、特に科目提供の可能性について(文系各学部から新たに1~2科目ずつを想定しています)お答えください。(文系学部のみ)

3.「B.理系科目」「1)講義系の授業科目」(中間報告 8~10 ページ)については、WG、理系科目責任者会議、大学における初習理科の研究会、及びWGと各学部の意見交換会等での検討を経て、次のように整理しました。

(1)入門科目：物理学については、分野別科目(科学・技術の世界)の中に、高校で物理学を履修しなかった、あるいは入学試験で物理学を選択しなかった学生を対象とする「入門科目」の開講を検討する。

化学についても、必要があれば同様の「入門科目」の開講を検討する。

生物学、地学については「入門科目」は設けない。

(2)準専門系コースの基礎科目(4単位：基礎理科Ⅰ、基礎理科Ⅱ)は、平成16年度に新たに開講した「基礎物理学」等をベースに、高校でその科目を履修したか、しなかったかに関わりなく、興味を持って履修できる、また理解できる内容とする。従って、この科目の履修には、上記の「入門科目」の履修を必須の前提とはしない。

1年1学期に「入門科目」を履修させる場合、「基礎物理学Ⅰ」等は同じ学期に並行して履修することも、次の学期に履修することもできるよう検討する。

(3)専門系コースの科目構成(6単位)は、次のように設定する(「 」内はおおまかな分野の区分であり、授業科目(講義題目)名は実行段階で確定する)。

物理学：「力学」「熱力学」「電磁気学」

化学：「化学結合論」「化学熱力学・化学平衡」「有機化学」

生物学：「生物多様性」「細胞生物学」「生理学」

地学：「地球の構造と進化」「宇宙と大気・海洋」「地球惑星科学の展開」

専門系コースを選択する学部(コース、学科)は、このうち一つを、以下に説明する「互換性科目」に指定しなければならない。

(4)互換性科目：狭い意味では、それぞれの学部・学科で2年次に開講される

専門科目のうち、(3)の各専門系コースに含まれる科目の内容をもつもので、当該クラスの少なくとも一部を他学部・他学科に開放できる科目を指す。この意味での互換性科目については、当該学部と各科目責任者で協議して設定する。

広い意味では、全学的に開放された共通性の高い専門科目を指す。準専門系コースを選択する場合は互換性科目の開講は義務づけられないが、いずれのコースを選択するとしても、各学部においてはこの広い意味での「互換性科目」の設定を前向きに検討していただきたい。互換性科目を増やすことによって学部の壁を低くし、選択の幅を広げ、学生に優れた授業科目を受講する機会を提供し、総合大学としての実をあげることができる。

(5)数学については、文系学部向けに新たに「入門科目」(4単位)の設定が必要と思われるので、関係学部と科目責任者で協議する。この場合、レベル2の科目(「線形代数学Ⅰ、Ⅱ」「微分積分学Ⅰ、Ⅱ」)は2年次向けに開講される。

理系学部の2年次向けの数学「微分積分学」「数学概論A、B」及び数学の「互換性科目」については、関係学部と科目責任者で協議する。

以上を前提に、以下の問にお答えください。(理系学部のみ)

問3-1.「入門科目」の設定について、上記の案以外のご希望があれば、お聞かせください。

問3-2.貴学部(コース、学科)では基礎科目の各科目について、専門系コース/準専門系コースのどちらを選択されますか(どちらかを選ぶ。専門系コースを選択される場合には、提供する「互換性科目」も書いてください)。

物理学： 専門系(互換性科目) 準専門系(基礎物理学)

化学： 専門系(互換性科目) 準専門系(基礎化学)

生物学： 専門系(互換性科目) 準専門系(基礎生物学)

地学： 専門系(互換性科目) 準専門系(基礎地学)

問3-3.上記の広い意味で、貴学部で開講可能な「互換性科目」を挙げてください。(数学については文系学部も記入できます)

物理学：

化学：

生物学：

地学：

数学：

4. 「B. 理系科目」「2) 実験系の授業科目」(中間報告 10～11 ページ) については、科目の基本コンセプトを見直し、「コアカリキュラムの一部」として新たな「自然科学実験」を構想し、理系科目責任者会議、及び基礎実験科目責任者を中心とした WG に具体案の作成を依頼したところです。その際、従来の「物理学実験」「化学実験」「生物学実験」「地学実験」の枠を取り払った「融合型」の科目(15 回 60 時間で 2 単位)を設定する可能性を検討しています。具体案が出来次第、別途お知らせします。

問 4-1. 「コアカリキュラムの一部」としての「融合型」の「自然科学実験」の導入について、ご意見をお聞かせください。(理系学部のみ)

5. 「C. 外国語科目」(中間報告 12～15 ページ) について

5-1. 「英語」については、「平成 18 年度以降の英語新カリキュラム(案)」(別添)に沿ってご検討ください。

問 5-1-1. 1 年次開講の「英語」(A: 発信型基礎科目、C: 時間開放型 CALL 授業、R: リーディング、E: 技能別選択科目) について、ご意見があればお聞かせください。

問 5-1-2. 特に、自学自習の CALL 授業、TOEFL-ITP 試験による単位認定について、ご意見をお聞かせください。

問 5-1-3. 「英語演習」は、1 年次に養われた英語力をもとに学術研究のツールとして英語を使えるようになることを目標とし、学部での英語教育との接合・国際交流科目との補完関係にも配慮した科目とすることを考えています。これについてご意見をお聞かせください。また、「英語演習」への学部教員の支援・協力の可能性についてもお聞かせください。

「初習外国語」については、現行カリキュラムの段階別ステップアップ式授業のシステムを維持しつつ、1) 外国語 B 演習、外国語 C、言語文化部外国語特別講義が同一の授業に共存していることによる混乱の解消、2) 外国語 B 演習、外国語 C の一部における極端に少人数の授業の解消を目指した改善案を言語文化部で作成しているところです。具体案が出来次第、別途お知らせします。

問 5-2. 「初習外国語」について、ご意見・ご要望があればお聞かせください。

6. 「D. 共通科目」(中間報告 15～16 ページ) について

問 6-1. (2) 情報科目については、現行の「情報処理 I」程度の内容は高校の

情報科目で学ぶことになるので、平成 18 年度以降の情報教育について高等教育開発研究部「情報教養教育研究会」で検討しているところです。具体案が出来次第、別途お知らせします。

情報科目についてご意見・ご要望があればお聞かせください。

問 6 - 2 . 統計学について、ご意見・ご要望があればお聞かせください。

問 6 - 3 . その他の共通科目について、ご意見・ご要望があればお聞かせください。

問 7 . 平成 18 年度以降の教育課程全般について、ご意見・ご要望があればお聞かせください。

用語解説

コアカリキュラム

本学では全学教育のうち教養教育を「全学共通の非専門教育」「純粋な教養教育」と位置づけ、平成 13 年度から教養科目に「コアカリキュラム」を導入した。その際の全学教育委員会の提案（平成 11 年）には、「学士課程は便宜的に教養教育，基礎教育，専門教育の三つに分類される。基礎教育の多くは理系では学部一貫の体系的な専門教育の中に取り込まれる。また学部レベルの専門教育は，理系・文系を問わずより基礎を重視した総合的なものになる。専門の骨格を明らかにし，専門的な素養を身につけさせることがその主要な目的となる。一方，純粋な教養教育は，リベラルアーツを中心とする必須の教養科目，すなわち，専門のコア（核）カリキュラムに対置される《コモン・コアカリキュラム》として，全学の協力のもとに実施される必要がある。これが新しい学士課程の中核をなすものである」と記されている。

CALL 授業（Computer Assisted Language Learning）

コンピュータを使った自律的な外国語学習システム。本学では平成 16 年度から本格的に導入され、全学部の学生が 1 単位の学習を行うようになった。

TOEFL-ITP 試験（Test of English as a Foreign Language）

北米の大学教育で外国人に要求される英語能力を基準とした共通試験。本学では平成 15 年度から全学部の学生にその簡易版である TOEFL-ITP 試験を受験させている。